

---

# プレゼント

莓-ichigo-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
プレゼント

【コード】  
N9252M

【作者名】  
莓・ichigo

【あらすじ】  
小学校5年生の後藤麻梨香は、同じクラスの高橋賢人のことを意識し始める。  
でも、恋愛はそんな簡単にうまくいくものじゃない。  
麻梨香の恋の結末は　！？  
麻梨香の小学校5・6年・中学校生活での友情、恋愛を描く青春ラブストーリー。

## プロローグ

君が私にくれたもの。

それは、本気で人を好きになる心。

出会ったときはまだ幼かったけど、

私はあの時から

君が大好きだったよ。

後藤<sup>ごとう</sup> 麻梨香<sup>まりか</sup>は、今日から5年生。

だけど、今家のベッドの中。

「あーあ…最悪。」

麻梨香は、登校初日から、水ぼうそうになっていた。

「初日に学校行けないなんて

ありえないっつーの!!!」

落ち込んでた麻梨香を襲った、もうひとつの悲しみ。

「え ……うそでしょ…。」

配られていたクラス表を見た麻梨香はがっかり。

4年生の時に仲良かった子とは離れ離れ、

嫌いな女の子が二人。

麻梨香の服をなめてきた男子とは、結局6年間ずっと同じクラス。

あとは知らない人ばかり。

こんなクラスで、

しかも最初の一週間クラスからいなくて、

麻梨香にはちゃんとやっていけるのか、という不安が押し寄せてきた。

それでも、登校した一週間後。

麻梨香がいない間に、世界は変わっているかな…って、思っていた。

もう、女子のグループとかもできちゃっているかな…って。

「おはよう…。」

びっくりした。

だって麻梨香に声をかけてきてくれたその子は…

神田 かんだ 美咲子 みさこ、麻梨香が嫌いだっただ女の子のうちの一人だったから。

「麻梨香のロッカーに、名前シール貼つといたからね」

初対面だけど、麻梨香は美咲子のこと、嫌いじゃなくなっていた。

「…すごく、いい子じゃない。」

しゃべらず嫌いで、勝手に嫌っていた自分が恥ずかしくなった。

ぐるっと教室を見渡して…

とりあえず、4年生の時も同じクラスだった、宝木 たからぎ 梨沙 りさに声をかける。

「おはよー！」

「あ〜、麻梨香！！おはよう！もう大丈夫なの？」

「うん、大丈夫！弟にうつされちゃってさ〜・・・」

「そうだったんだ。大変だったね。」

「うん。」

それで梨沙は、また話してた子たちとおしゃべりを始めた。

う〜ん…あと知っている子は…

そう思って教室でしゃべっている子たちを見ていたら。

「おはよー！」

声をかけてくれた子がいた。

「おはよー！ってあれ？」

前同じバレエスクールだったよね？」

「うん！覚えててくれたんだ？」

「うん。」

その子は、坂井さかい 詩歌しいか。

一年生の時に入った、バレエスクールにいた子。

そしてその隣に…

(うっ… 詩歌、この子と仲いいの…?)

麻梨香あずかが嫌いな、小口こぐち 李弥りみ。

「おはようー！」

小口さんは、声をかけてくれた。

「もう大丈夫なの？」

…あれ？意外と普通…？

「うん、大丈夫！心配してくれて、ありがとう。」

「よかったあゝ、学校こないから、心配していたんだよ。」

うわぁ…見た目のファッションが黒いから好きじゃなかったけど、性格わりと普通かも…。

一日目で、嫌いだった二人のいいところを見つけられた。

嫌いだった二人のこと、嫌いじゃなくなった。

見た目やしやべれないってだけで人を嫌いになっちゃいけない。

それは、きっと、二人から麻梨香への、

プレゼントだ。

続く。

## 第1話\*

風が心地よくなってきた、  
新しいクラスにも慣れ始めたころ。

麻梨香は、新しい、そしてびっくりな事実を知った。

うん…まあ、特に珍しいことじゃない。

同じクラスの、高橋のお父さんと、

麻梨香のお父さんの働く職場が同じだった。

ただそれだけのこと。

麻梨香のお父さんは、車会社の課長だ。

そして高橋のお父さんは、同じ会社で働いているらしい。

これを知るきっかけになったのは、担任の言葉だった。

「そういえば、後藤のお父さんと高橋のお父さんて、  
同じ会社で働いてるんだよなあ？」

この言葉を聞いたとき、麻梨香はそもそも高橋という人を知らなかったから、

頭の中は疑問符だらけ。

一方の高橋は、先生のこの言葉を

麻梨香の後ろで聞いていたらしい。

高橋はなんと、麻梨香の後ろに座っていた。

「え、マジで！？俺、今日父ちゃんに聞いてみるわ！」

そういつた高橋の笑顔は…

初対面と言っているほどの麻梨香の顔には、

(う〜ん…猿？)

程にしか映らなかった。

\*\*\*

次の日、麻梨香が椅子に座って教科書を鞆から出していると…

「おっはよ〜！」

高橋が登校してきた。

「俺の父ちゃん、お前の父ちゃん知ってるって！」

そう言いながら笑った高橋は、猿、だった。

（はっ！私、お父さんに高橋のお父さんのこと聞くの忘れていた！）

「あ、あの…」

「お前の父ちゃん、準教授なんだろう？」

俺の父ちゃんも！」

「私、お父さんに、高橋のお父さんのこと聞くの、忘れてたの！  
ごめんね！」

「いや、べつにいいって！んなことどうでもいいことだし。」

麻梨香は、きつと、このとき、

高橋としゃべった瞬間から

高橋の、人を惹き付ける人柄に惚れたんだ。

それからというもの、麻梨香は、高橋のことを意識してしまい、

しゃべることもひと苦労になってしまった。

だけど、弥李みりが高橋や、高橋と一緒にいる河野こうの 竜矢たじやと仲が良かったので、たくさん話す機会ができたことが嬉しかった。

（話している内容がほとんどしもネタだったのはちょっと勘弁、だ  
ったけれど…）

季節はあっという間に夏。

蝉が暑苦しく鳴き始め、日差しがだんだん強くなってきた頃。

学校は、終業式を迎えた。

麻梨香の今年の夏休みは、忙しい。

首都圏を受験することになっている麻梨香は、

あと2年で中学受験なので、それに向けて今年からバリバリのスケジュールだ。

毎日6時間の講習。

週に一回のテスト。

小5の麻梨香には多少きつかったが、

3年生の時から親友との約束がそれを忠実に守らせた。

「一緒に受験して、一緒に電車で通おうね。」

それは、小さかった二人の、大きな目標だった。

高橋は麻梨香の行っている塾のすぐ近くの塾だ。

麻梨香は、塾に行くたびに、いるはずのない高橋の姿を探した。

そして、小さくため息をついた。

塾では会えなかったけれど、学校で高橋の姿を見ることはできた。

麻梨香は合唱部だったので、

合唱が終わると、校庭の鉄棒に座り、

野球部の練習を眺めた。

泥だらけでボールを追ったり、

走ったりしている高橋は汚かったけれど、

頑張っている高橋が好きだった。

だからいつも小声で応援していた。

「がんばれ」と。

忙しい夏休みは、飛ぶように過ぎ、

あわただしく2学期が始まった。

2学期が始まって1週間もすると、運動会だ。

麻梨香は今年、紅組。

クラスでも紅白の半分に分かれてしまうのだが…

運よく、高橋と同じ組になれた。

そして続く色別集会。

団長は6年生、そして、高橋と麻梨香は、応援団に入った。

「頑張ろうね！」

「おう！」

威勢よく交わした声。

その日から、毎日、昼休みに応援団の練習が入った。

「高橋！今日も練習！」

「おう、行くうぜー！！！」

「暑いのにめんどくさいな」

「じゃあならなきゃよかったな。」

「うっん！やる！」

行く途中で交わした言葉は他愛もないことだったけれど、

暑さに負けず、麻梨香の心を温かくした。

そして迎えた運動会当日。

精いっぱい応援。

力限りの競技。

紅組は…

優勝だった。

「やったあ！」

みんなで手をたたき合った。

6年生は、泣いていた。

最後の運動会でいい思い出を残してあげられたと思うと、  
ちよっぴり、麻梨香も泣きたい気持ちになった。

「後藤、来年も、応援団一緒にやろうな。」

そうだった高橋の笑顔は、

麻梨香の目には猿と映らなくなっていた。

## 第2話\*

「後藤、来年もいつしよに応援団やるつな。」

あの言葉は、ウソだったの…？ねえ、高橋。

「それでは今年の紅組の応援団長は佐藤くん、副団長は後藤さんに決めました〜〜！！」

パチパチパチ。

みんなが拍手してる。

でも麻梨香にはその音は聞こえていなかった。

（なんで…一緒に応援団やるって言ったのに…  
「俺、団長やるからお前、副団やれよ！」って、言ったのに…  
）

当の高橋は、ぼけーっとしていた。

季節は6年生の運動会、秋。

夏の暑さがじりじりと残るこの季節、

麻梨香たち6年生にとっては最後の運動会。

母親に「副団長になった」と伝えると、

母親は「あらっ、じゃあ衣装をつくろうかしらねえ??あの衣装古いもの。」

と、俄然やる気だ。

でも、麻梨香はすっきりした気分ではなかった。

どうして応援団、やらないんだろう。約束したのに…

昼休みや放課後の練習でも、もやもやは吹き飛んでくれなかった。

ついに迎えた運動会当日。

麻梨香は紅組の先頭に立って、走り抜ける。

「紅組行くぞー!!」

「おー!!!!!!」

「白組行くぞー!!」

「おー!!!!!!」



校内の中から選抜で速い人を各クラスから男女各1名選出。  
運動会の見どころだ。

そのリレーには、高橋も出るようになっていた。

麻梨香は、足が遅く、補欠にさえなれなかった。

「パーーン」

リレー開始のピストルが鳴り響く。

最初は3年生。

3年生もなかなか速い。

だんだんと高学年になり、

最後に6年生。

団長の佐藤も出ていた。

「佐藤　　！がんばれーーーー！」

「いけーーーーー！」

みんな、精いっぱい応援。

最後の運動会、勝ちたい。

その思いは、誰もが持っている。

「高橋　　！最後まで負けないで！」

汗を流しながら必死に走る高橋に聞こえるよう、

精いっぱいの大声で言った。

「まげちゃ、だめ――――！！」

\*\*\*

「優勝は…青組です！！」

青組の応援歌が流れる。

紅組は、最下位だった。

最後の運動会、優勝できなかったのが悔しい。

けれど、麻梨香は満足だった。

大好きな高橋のこと、精いっぱい応援できた。

自分が副団長として引っ張ってきた、この組を、

最後まであきらめないうで応援できた。

そのことが、何よりの誇りであり、

きつとその心は、誰かから麻梨香への

「諦めない気持ち」という名前のプレゼントだったから。

\*\*\*

運動会が終わると、待っている行事は修学旅行だ。

このクラスで、最後の大きな行事…

京都で、たくさん思い出を作ろう。

そして、悔いのないようにこの学校を離れよう。

受験も迫っている麻梨香は、そう強く心に誓った。

続く。

### 第3話\*

9月29日。

運動会が終わってすぐのこの季節、

6年生にとって最後の大きな行事・修学旅行。

麻梨香たちも、毎年恒例の奈良・京都への修学旅行に出かける。

臨海学校・林間学校・修学旅行では、グループ分けされる。

先生たちが決めた、ランダムなグループだ。

麻梨香は、必死に、一つだけ、ただ一つだけ、願っていた。

どうか、高橋と同じ班になれますように…

班が一緒になれば、電車の中の席も隣・近くになれる。

最後の思い出作りには、運が必要だった。

詩歌しいかにも弥李みりにも、

「一緒になれるといいね!」

と言われていた。

グループ分けの結果は、9月25日に発表された。

麻梨香のグループは…

「後藤・坂井・小口・高橋・河野だ」

先生の口から出てくる名前に、

麻梨香たちはただ、びっくりしていた。

そして、数秒後には、

「やったあ~~~~~!!!!!!」

3人で抱き合ってた。

ほんとうに、奇跡だと思う。

仲よし女子3人組と、仲よし男子2人組が一緒になったこと。

そして、麻梨香が、好きな人と一緒のグループになれたこと。

「麻梨香っ！よかったじゃん。」

弥李が小声で言って、つついてきた。

「うんっ……!!うんっ!!!!」

麻梨香は、ただただ、

何度も頷いていた。

\*\*\*

修学旅行。

それは小学校生活最後の思い出作り。

麻梨香にとって、本当に、

みんなとの最後の大きな思い出。

今日は9月28日。出かける前日。

実は、一週間ほど前から、迷っていた。

ある、一つのこと

それは、修学旅行で、高橋に気持ちを伝えるべきなのか、というところ。

告白なんて初めてだし、今まで考えたこともなかった。

今伝えなかったらきつと一生後悔する。

そう思うと同時に 怖かった。

もし振られたら、って思うと、

勇気はどんどん、

風船がしぼむみたいに、小さくなっていった。

みんなに言ったら、きっと、

誰も反対しない。

だって、麻梨香の気持ちを知っているのは、

ほとんど全員だから。

高橋はどうかわからないけど、

ほとんどみんなが知っていたから。

だから、誰にも言えず、一人で悩んだ。

## 第4話\*

9月29日。とうとう、修学旅行当日。

今の時間は5時45分だが、もうすでにみんな集まっていた。

奈良に行くには時間がかかるから、集合時間が早い。

6時には学校を出発しないと、9時につかない。

みんなは早朝もいいところだというのに、

はしゃぎまわっている。

騒いで、走り回って、校庭で鬼ごっことかしちやってる。

朝早いのが苦手な麻梨香はとてもはしゃぐ気にはなれない。

それに加えて毎晩ろくに眠れず、いろいろ考えたものだから、

某・貞子もお手上げ状態の真っ暗ガールになっていた。

そう・・・

告白のこと。

麻梨香なりに、考えたつもりなのだけれど・・・

イマイチ、いい答えは見つからなかった。

告白って、前もって考えておくべきことなのかな？

そう思うと、考える必要がないようにも思えてきて・・・

たくさん悩んで、いっぱい考えたけど、

結局、その場の成り行きに任せてみよう、ということになった。

キイイイイイイン。

マイクの嫌な音。

校長先生が話始めるところだ。

「ええ、みなさん、おはようございます。」

「おはようございます」

朝っぱらから元気な生徒たちだ。

「今日は、朝早くからお疲れさまでした。

いよいよ待ちに待った修学旅行です。

楽しい思い出を、たくさん作って帰ってきましょうね。」

先生の話が終わると、修学旅行2日分の予定の紙を配られた。

今日は向こうに着いたら、昼食を食べ、

お店などを見た後宿に行ってゆっくりする。

そして、明日、

金閣寺を見に行く。

たったの一泊二日だ。

その短い旅行を楽しむために、

みんなはこんなにもはしゃいでいる。

麻梨香は、自分が6年生だ、ということのを改めて実感した。

気が付いたら、みんながバスに乗り始めていた。

「駅まではこのバスで行くんだって。

麻梨香も、乗ろっ！」

そう言ってくれたのは詩歌しいかと李弥りみだった。

「うんっ！」

まだ暑さがちよっぴり残る秋の初め。

麻梨香たちは、修学旅行へと出発した。

\*\*\*

「うわあ~~~~~」。

「すごい！きれいなところ。」

みんなの気持ちを、詩歌が代弁した。

麻梨香たちが泊るところは、

紅葉しかけたモミジが山いっぱい広がるのが見える、

景色のいいホテルだった。

部屋割は、グループが一緒の同性同士…

「李弥っ！詩歌っ！

部屋一緒だね！！」

「ほんとだぁ~~~~~！」

「楽しみだね~~~~！」

部屋に荷物を置いた麻梨香たちは、

早速買い物に出発。

「あ、これかわいい！」

「これも~~~~！」

「うわー、このアイスおいし~~~~い！」

あちこちから声が聞こえる。

ふと立ち止まった麻梨香の目に、

「恋愛成就御守」

という字が飛び込んできた。

「恋愛成就、かあ・・・」

一瞬、買おうかな、と気が揺らいだ麻梨香だが、

「でも、御守に頼っちゃだめだよね。」

と、買うのをやめた。

結局麻梨香が買ったのは、

李弥たちとお揃いのモミジのストラップと、

花柄の丸い玉が付いている

ピンクと青の色違いのストラップ。

花柄の玉付きストラップは、

誰かたのお揃いってわけで買ったんじゃない。

いつか

麻梨香の初彼になった人への、  
プレゼントとして。

なぜかはわからないけれど・・・

ただ、そういう気分で買ったものだ。

だから、誰にも内緒で買って・・・

誰にもわからないように、

引き出しの奥にしまっておこう。

\*\*\*

あっというまに1日目は終わり、

お風呂も入って、夕飯も食べて、

あとは寝るだけ、となった。

ここで、ただ寝るだけ、にしないのが修学旅行。

今の時刻21時から、就寝時刻の22時30分までは自由時間として使っていることになっていた。

前々からクラスで決めていた遊び・・・

罰ゲームトランプッ！！

罰ゲームが書かれたトランプでババ抜きをし、

一番最後にジョーカーを持っていた人が

一番に上がった人が罰ゲームいう。

負けた人は、その人が命令したことをやらなければならない。

そういうルールのゲームだ。

参加資格なし、希望者のみ参加のこのゲームに参加したのは、

クラスの半分程度・・・15人。

もちろん、麻梨香や詩歌たちも参加した。

一人ずつにカードが手渡されていく。

罰ゲームババ抜きが始まった。

慎重に、慎重に、一人ずつカードを抜いていく。

ときに悲鳴が上がったり、

冷やかしがあつたり・・・

一回目は、美沙子みさこだった。

命令者は・・・河野。

「なにがいいかな〜・・・」

河野は悩んでいる様子。

そこに、片桐<sup>かたぎり</sup>が耳打ちした。

「# \$ % & @ \* + ?」

なんて言ったのかは聞こえなかったけど、

河野がニヤツと笑ったように見えた。

「神田！五百重<sup>いりえ</sup>に告白してこいっ！」

河野が叫んだ。

「ピュ〜ピュ〜！」

口笛がなる。

五百重つて、たぶんクラスで一番モテてるヤツ。

美沙子は、きつと五百重のことが好きだ。

勝った人への否定は通用しない。

反抗も通用しない。

それがわかっていたから、美沙子は五百重の所に行った。

告白タイムは、みんなに見られるものではないから、

1つの部屋を2人が占領して、ドアも閉め切って、

誰も見れないところで2人っきりの世界。

もちろん部屋の外は野次馬だらけだけど。

「……」

美沙子が出てきた。

でも様子が変だ。

なんかオーラが出てるような……？

「どしたの??」

「どうだった??」

野次馬が一齐に口を開く。

一番近くにいた麻梨香も、こっそりと耳打ちで聞いた。

「……あのね、ちょっと……。」

「ん??」

美沙子は麻梨香に耳打ちした。

「ええ~~~~~!!!!!!?!!?」

美沙子は、『あのね、付き合うことになったの。』

といったのだ。

麻梨香と一緒にいた李弥たちもそれが聞こえていたらしく、

その話は野次馬たちにいつせいに広まった。

思いがけず、修学旅行の罰ゲーム告白でカップルがひと組誕生してしまっただのだ。

その思いがけない出来事にみんなびっくりして、

就寝時刻の22時30分までまだ30分くらいあったけれど、

罰ゲームトランプは終わりになった。

麻梨香たちも自分たちの部屋に戻り、

布団に入って・・・

でもまだ寝るわけない。

恋バナが始まった。

「麻梨香っ明日高橋に告りなよっ!!!!!!」

いきなり李弥が言ったので麻梨香はびっくりして飛び上がった。

「ええ〜っ！？」

「だって、せつかくの修学旅行だよ！？」

「チャンスじゃん！！！」

「いや、でも……」

「麻梨香は、そんなだからいつもだめなんだよ！！！」

恋愛なんぞしない詩歌に言われるとは……。

「いやっ、でも、ちゃんと自分で考えてますんでっ！」

麻梨香はそういうと、バサッと布団にもぐりこんだ。

（いやいやいや、ちょっと待て、明日告白〜っ！？）

そう考えると、心臓がバクバクだった。

続く。

## 第5話\*

修学旅行3日目。

揺られるバスの中で、麻梨香は黙りこくっていた。

「麻梨香、明日高橋に告っちゃいなよ!」

昨日詩歌たちに言われた言葉が、麻梨香の心の中で繰り返されていた。

今日、告白してしまえば、楽になる？

今日、全部を言ってしまえば、もう苦しまなくていいの？

違う気がした。

きっと、告白しても振られるだけ。

そもそも、麻梨香たちはまだ6年生だ。

告白して、どうなるの。。

けれど、麻梨香には『受験』という言葉の壁がある。

タイムリミットはあと半年もない。

今ここで、気持ちを言わなかったら、伝えなかったら、もしかしたらもう一生、高橋とは会えないかもしれない。伝えられないかもしれない。

麻梨香の心の中は、たった二つの選択肢だけで、風船みたいに膨らんでいった。

\*\*\*

午後12時。

昼は、ホテルでもらってきたお弁当を広い公園のようなどころでみんなで食べることになっている。

麻梨香は、詩歌や李弥と一緒に食べようと、二人の元へ行った。

「詩歌、李弥、一緒に食べよう」

「「いーよっ!」「」

3人がお弁当を広げ始めた時。

「「ここでいいかー?」

「「いんじゃない?」

「んじゃ」こで食べるか。」

「いただきまーす」

片桐・河野・高橋たちの声だ。

高橋が、すぐとなりでご飯を食べている

そう思うと、麻梨香は全然食が進まなくなってしまった。

「ごちそうさまでした。」

結局、麻梨香はほとんどのおかずを残してしまった。

ホテルの人には申し訳ないけれど

とても、全部食べられるような状況ではなかった。

「トランプやんねえ？」

片桐が言いだす。

「いいねっ！やろっ」

「あたしもやるやるー！」

詩歌たちはノリノリだ。

「罰ゲーム付きな。」

「OK。」

「後藤、おまえはどーすんの？やるの？」

麻梨香は迷った。

罰ゲームといったら、たぶん麻梨香は告白させられるに違いない。

でも　いつまでも逃げるわけにはいかなかった。

「……うん、やるよ」

「よし、じゃあ……6人な。」

トランプが配られる。

麻梨香は、李弥にもらい、高橋に渡すというポジションだ。

「ひいつ……！」

麻梨香がひいたのはババだった。

うまくシャッフルし、高橋に回す。

「うわっ、ハメられたー……」

ババはどんどんみんなのところを回っていく。

そして4人が終わり、最後の3枚の行方が麻梨香と片桐にゆだねら

れた。

麻梨香がひいたトランプは

ババ。

麻梨香の持っていたトランプは片桐のものと一致して、

麻梨香の負けという形で終わってしまった。

罰ゲームは・・・河野を見ると。

「ぶはっ、おまえ、どうせもうわかってんだろ、罰ゲームの内容。」

「うっ・・・やっぱり・・・」

「はっはっは、告白して来いっ！」

「わーーーーー・・・」

して来いっていうより、こじでしろって感じだ。

迷ったけれど・・・

【わたしね・・・びっくりしないでね。

わたしね・・・高橋のことが・・・っ好き・・・なのっ！】

みんなの前で言うのはやっぱり恥ずかしかった。

だから、そっつと、高橋の前によって行って、

高橋だけに耳打ちした。

高橋が驚いた顔で麻梨香のほうを見ている。

気がつけば、周りを麻梨香のクラスの生徒が囲んでいた。

「……」

シーンという音が聞こえそうなほど、静かな公園。

鳥の声も聞こえない。

あたりを静寂が包み……

今度は、高橋の顔が麻梨香の耳に近づいた。

【それ、ほんと？】

【うん、てかたぶん、高橋以外全員知ってる。】

【あのさ、うれしいってかさ、おれも、後藤のこと好きなんだけど。

】

「……っ!」

【でもな、おれたちって小6だろ？

今のままじゃ、ダメ？】

【今のままって・・・？】

【ふつーにしゃべったり、ふつーに仲よくする。】

【いいよ。】

【あ、それとこのことは誰にも言っなよ？

俺らだけの、秘密だから。】

全部、内緒。

みんなには内緒の、二人だけの話。

周りのみんなは、しゃべり終わったらしい二人を見て、

「何しゃべってたの？」

と聞いた気だった。

でも、二人の、秘密。

みんなには、内緒。

伊藤などは勘がいいからもしかしたらまたつわさを流されてしまうかもしれない。

それでも、二人で内緒話をした時間は、

麻梨香にとってはかけがえない宝物 思い出。

高橋からのプレゼントの糸じだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9252m/>

---

プレゼント

2010年10月13日05時35分発行